

# 東洋學報

第參拾參卷第二號

昭和二十五年十月

## 論 說

### 清の太祖興起の事情について

和田 清

清の太祖興起の事情については、各種の實錄など史料が具備してゐるやうであるが、實は必ずしもさうではない。筆者はこゝにその勃興當初の内情の内、(1)尼堪外蘭 (Nikan Waman) といふ人物の存否について考へ、大分怪しい節もあるが、やはりかういふ人物は實在したものと斷じ、(2)太祖が最初同族から迫害されたのは、その地位に非ずして權力を握つたため、族人の嫉視を買つたものだと考へ、太祖が隱忍よく之に打克つた事情を述べ、(3)太祖は崛起と共に北方の葉赫 (Yehé) と同盟して哈達 (Hada) を圖り、後に哈達の衰ふるや、蒙古と通謀して葉赫と争つたこと、及び(4)當時の一般的情勢として、久しく廢類してゐた滿蒙の奥地の城寨が太祖出生の頃から漸くまた築造され始めて來たこと、それは専ら流入の漢人の指導によることであつたが、それと共に女直内部の社會的進歩は著しく、これこそやがて太祖勃興の素地になつたこと等を論じた。

清の太祖興起の事情について

和田

嘗て内藤湖南博士は清初の史料の豊富なことを讃して、「太祖と殆ど同時代なる我が徳川家康公にこれだけの記録が備はつて居らうか<sup>(1)</sup>」と言はれたことがある。誠に太祖興隆の事情については、明・朝鮮の記載を除いても、滿洲側だけでも、各種の太祖實録・滿洲實録・滿文老檔等があつて、委曲を盡してゐるやうである。ところが實際に當つて見ると、必ずしもさうでない。先づ最も詳しい滿文老檔にはその最初の部分（萬曆三十五丁未年即ち太祖四十九歳までの分）が缺けてゐるし、その残つてゐる實録でも極めて簡單で、殊に記録に馴れない滿洲の歴史家は、讀者の理解の程を顧みず、たゞ自らはんと欲するところだけを述べてゐるので、そのたよりない片面的な記述は頗る諒解し難い。かくて太祖勃興の始末はなかく明瞭にし難いのである。尤もこれについては清史稿列傳九・一〇の外、園田一龜氏に「明萬曆初期に於ける遼東女直の消長」、「清太祖勃興初期の行迹<sup>(2)</sup>」等の雄篇があつて頗る光明を加へられ、私も嘗て「滿洲諸部の位置について」、「清祖發祥の地域について」<sup>(3)</sup>その他を書いて少しく考へて見たが、清史稿は表面的で、園田氏の分は専ら太祖の用兵と對明關係とに限られ、私のは太祖の舉兵以後に及ばず、未だ十分でない點が甚だ多い。以下清史稿や園田氏の研究に明かなところを略し、別にその問題の二三について考察して見よう。

先づ第一に尼堪外蘭 (Nikan Wailan) の問題である。實録によると、初め素克素護河 (Sukhsuhun) 部即ち蘇子河部内の圖倫 (Turun) 城に尼堪外蘭といふ者があり、癸未の歲即ち萬曆十一年 (1583) 二月明の遼東の總兵李成梁を誘つて蘇子河畔の古埒 (Gure) 城主阿太 (Atai) 等を攻め滅ぼさしめた。古埒城は今の古樓の地にある要寨で、阿太は明の記録に建州右衛の都指揮使王杲の遺兒阿台として出て來る強酋である。この時阿太の妻は太祖の伯父禮敦巴圖魯 (Jidun Baturu) の女であつ

たので、太祖の祖父覺昌安 (Giocangga) は古埒城が圍まれると聞き、孫女の陥れらるゝを恐れ、第四子塔克世 (Taksi) 即ち太祖の父親と同じく赴き救つたが、既に至れば、攻城甚だ急だつたので、塔克世を城外に待たしめ、獨り城中に進入した。ところが阿太に抑へられて出ることが出来なかつたので、塔克世もまた城に入り、城陷るに及んで、兩者とも擒へられ、尼堪外蘭に讒構せられて俱に之に死んだのだといふ。

この事は明人の記載するところもほど同様で、例へば籌邊碩畫の卷頭に載せた程令名の東夷奴兒哈赤考には左の如く、  
先年、叫場 (覺昌安)・他失 (塔克世) 皆忠順、爲中國出力、先引王台拿送王杲。後杲男阿台將叫場拘至伊寨、令其歸順、合黨謀犯、以報父讐。叫場不從、阿台拘留不放。大兵征勦阿台、圍寨攻急。他失因父在內、慌忙救護、混入軍中。叫場寨內燒死、他失被兵誤殺、因父子俱死。

とあり、互に相補つてその情況を髣髴せしめるに足る。實録にはこの時太祖が明側にその冤を訴へたところ、明もその誤殺の罪を認め、

遂以屍還、仍與勅書三十道・馬三十四。復給都督勅書。  
とあり、東夷奴兒哈赤考の續文にも

時鎮守李總兵將他失屍首尋獲、查給部夷伯捧領回。又將寨內所得勅書二十道・馬二十四給領。

と見えてゐる。太祖が明より都督の勅書を給せられたのは、これより後數年の萬曆十七年九月のことであるから、實録にここに「復給都督勅書」とあるのは嚴密に言へば誤であるし、勅書や馬匹の數にも多少の誇張があるが、その他は誠に能く合つて、兩者符節を合するが如しといふことが出来る。勅書とは朝貢貿易の許可證である。いづれにしても、この時太祖の父祖が同時に殺されたので、太祖は年二十五歳にして始めて自立したのであつて、これは太祖の身上における一大事件と言は

なければならぬ。

さて太祖の父祖は尼堪外蘭に讒殺せられたので、太祖の擧兵は先づ尼堪外蘭を討滅するにあつた。その事は皇清開國方略にも東華錄にも、否、後の聖武記・清史稿などにも皆能く明記せられてゐるので、世に知られた事實であるが、滿洲實錄の本文には前掲の續きに左の如くある。

太祖曰、「殺我祖父者、實尼堪外蘭唆使之也、但執此人與我、即甘心焉。」邊臣曰、「爾祖父之死、因我兵誤殺、故以勅書馬匹與汝、又賜以都督勅書、事已畢矣、今復如是、吾即助尼堪外蘭、築城於嘉班 (Giyaban)、令爲爾滿洲國主。」於是、國人信之、皆歸尼堪外蘭。其五祖子孫對神立誓、亦欲殺太祖以歸之。尼堪外蘭又迫太祖往附。太祖曰、「爾乃吾父部下之人、反令我順爾、世豈有百歲不死之人、」終懷恨不服。

なほこの時蘇子河部内の薩爾滸 (Garhu) 部長卦喇 (Guwara) なる者が尼堪外蘭のために譖せられ、撫順の將官の前で責治せられたので、その弟諾密納 (Nominna) が同部内の嘉木湖 (Giyamuhu) 寨主噶哈善 (Gahasān) 等と相俱に忿恨し、「これらの人を仰望せんよりは、愛新覺羅 (Aisin Gioro) 六王の子孫に投ずるに如かず」といつて遂に來附した。そこで太祖はこの年五月父祖の遺甲十三副を以つて、諾密納と結んで蹶起したが、太祖の一族三祖索長阿 (Socangga) の第四子龍敦 (Longdon) が諾密納兄弟を誘つて背き去らしめたので、太祖は獨力纔に圖倫城に克つて回つた。その秋八月太祖は復た兵を率ゐて尼堪外蘭を嘉班城に攻めたが、この度もまた諾密納兄弟が敵に通報したので、尼堪外蘭は城を棄てて逃れ、明の撫順所東南の河口臺に入つた。明の守邊の軍が之を攔阻するのを見て、太祖は明兵が尼堪外蘭を助け戦ふものと誤解し、兵を引いて歸つた。

太祖はその後薩爾滸城の諾密納兄弟を撃ち滅したが、尼堪外蘭の部族並に之に歸附した者どもは相謂つて曰ふのに、「尼

堪外蘭は前に敵兵の逼るところとなり、垂亡の際に値ひ、往いて明邊に奔れるに、明は尙ほ且つ容れず、況んや肯へて城を嘉班に築いて滿洲國の主たらしめんや。前言は皆吾輩を誑せるを證するに足るのみ」といつて遂に之に叛いたので、尼堪外蘭は懼れて妻孥親屬を携へて法納哈 (Fanhah) 所屬の鄂勒琿 (Olhon) に逃れ、城を築いて居住したといふ。鄂勒琿はまた鄂爾歡・鵝兒渾にも作り、乾隆欽定の戰跡輿圖が之を黑龍江省會齊々哈爾 (Cielan) の南方に置いてより、何秋濤の朔方備乘卷などには「在齊々哈爾城西南三十餘里、周二里許」などとあるが、勿論左様な所ではない。「法納哈所屬」の五字は武皇帝實錄には「汎納哈所屬」に作り、他の實錄には闕いて見えなところであるが、Fanhah とは撫順關北方の撫安堡の滿洲名であるから、汎納哈は恐らく汎納哈の譌で、法納哈所屬の鄂勒琿は必ず撫安堡邊外の地でなければならぬ。

太祖はこの間に先づ本據の蘇子河部を定め、棟鄂 (Donggo) 部を陥れ、進んで渾河部・哲陳 (Jecen) 部等の聯合勢力を撃破したので、萬曆十四年七月には哲陳部所屬の托漠河 (Tonoho) 城を取つた勢に乘じ、遂に仇人の鄂勒琿城を攻めて之を陥れた。その始末を實錄には左の如くある。

乘便往攻仇人尼堪外蘭。沿途諸部皆是仇敵、星夜越進、攻鄂勒琿城克之。時尼堪外蘭不在城中。初城外有四十餘人、不及進城、帶妻子逃走、爲首一人穿青綿甲、戴氈帽。太祖見之、疑是尼堪外蘭、單身直入四十人中。内一人箭射太祖胸旁、從肩後露鏃、共中傷三十處。太祖不怯、猶奮勇射死八人、復斬一人、餘衆皆散。鄂勒琿城内有漢人十九名、亦殺之。又捉中箭傷者六人、太祖復深入其箭、令帶箭、往南朝傳信、「可將仇人尼堪外蘭送來、不然、我必征汝矣」、遂回。明邊吏遣使言、「尼堪外蘭既入中國、豈有送出之理、爾可自來殺之。」太祖曰、「汝言不足信、莫非誘我入耶。」使者又言、「若不親往、可少遣兵去、即將尼堪外蘭與汝。」太祖令齎薩 (Sag) 帶四十人往索之。及至、尼堪外蘭一見、即欲登臺趨避、而臺上人已去其梯、尼堪外蘭遂被齎薩斬之而回。明國因前誤殺太祖父祖、自此每年與銀八百兩・蟒段十五疋、通和

好焉。

以上が尼堪外蘭に關する記事の殆ど全部であるが、これによつて見ると、尼堪外蘭は隨分意氣地のない男ではあるが、相當重要な地位を占めた人物で、殊に明との交渉は最も深い。然るにこの男のことは明の記載には假りにも見えない。前には略したが、太祖の父祖の叫場（覺昌安）、他失（塔克世）こそ明と滿洲との間に立つて周旋最も努めたもので、明人の記載には、或は「先是、奴酋（奴兒哈赤）父塔失（他失）有胆略、爲建州督王杲部將、杲屢爲邊患。是時、李寧遠（寧遠伯李成梁）爲總鎮、誘降酋父、爲寧遠嚮導計杲、出奇兵、往返八日而擒杲、酋父既負不賞之功、云々」といひ、或は「初奴兒哈赤祖叫場・父塔失、並從征阿台爲嚮導、死兵火」といひ、太祖自身の語にも自らその功を述べて、「祖父與圖王杲・阿台、有殉國忠、云々」ともある。清の實録に建州の先輩、さしもの大酋王杲のことが少しも現はれてゐないのは、確にその疚しいところを避けたもので、この間の内情を察せしめるに足る。尼堪外蘭は寧ろこの叫場・他失の影のやうな男で、その名も事も却つて一切明側の記載には見當らない。これは果してどういふことか。更に怪しむべきは、太祖の經營は大體近きより遠きに及び、最初は容易に明の邊外までは及び得なかつた。それは萬曆十四年最後の襲撃の時にも、「沿途諸部、皆是仇敵、星夜越進」とある通りである。然るに初め尼堪外蘭を襲ふや、舉兵の劈頭から嘉班城即ち今の撫順の東隣の大夾邦を陥れ、直に明の邊外に薄つたやうに書いてあることである。それは果して可能のことであつたらうか。疑つて見れば、怪しいのは尼堪外蘭の名義である。Nikan とは言ふまでもなく滿洲語で漢人といふことば、Waiian は外郎の轉訛で、官吏といふ意味に外ならぬ。乃ち尼堪外蘭とは中國官人（Chinese Mandarin）といふことである。

だから考へやうによつては、この明側の記載に絶えて見えない尼堪外蘭なる人物は實は假想の烏有子であつて、清の太祖の父祖の影に外ならず、明に通じて女直の大酋を裏切つた父祖の不名譽を蔽はんがために案出された物語の名残りを示すも

のではないかと疑はれぬでもない。しかしそれにしても、それと太祖とを必死の關係で競争させることは要るまいし、況して上掲のその最後の場面などは如何にも具體的敘述で、到底架空の物語とは考へられない。さう考へれば、やはり尼堪外蘭は實際有つた人とする外はなからう。その明人の記載に現はれないのは、小才のきく通譯か何か、餘り小さな人物だつたからで、清人の記述は徒に之を誇張してゐるのであらう。太祖が最初に之を明邊まで追ひ詰めたのは薩爾滸の酋長の手引きなどがあつたため、尼堪外蘭といふ名も必ずしも實際として有り得ぬ名前ではない。もし果してさうすれば、太祖はこの仇人を追ふために、餘人の及ばぬ精力と機智とを發揮したものである。たゞ實録の誇張の甚しいことは事實であつて、太祖は初め努めて明に恭順を装つてゐたのであるから、明に對して實録に見えるやうな、そんな無用な強硬の辭を弄する筈がない。また前掲實録の末尾に、「これより毎年銀八百兩・蟒段十五疋を與へた」とあるのは、實はこの後十餘年萬曆三十年前後の交、所謂寬奠棄地の撫賞であつて、その實額はやはり少しく尠い銀五百兩・蟒段紗十疋だつたのである。<sup>(8)</sup>

## 二

第二に問題になるのは、太祖が最初専ら一族から迫害されたことである。初め尼堪外蘭の明の後援を得るが如きや、「五祖子孫對神立誓、亦欲殺太祖以歸之」とあつたことは前にも述べたが、五祖とは寧古塔貝勒 (Ninguta Belle) 六祖の中、太祖の一家を除いた他の五祖の意である。即ち太祖の祖父四祖覺昌安の三兄、長祖德世庫 (Desiku) 二祖璦圖 (Iicun) 三祖索長阿 (Socangga) 及び二弟の五祖寶朗阿 (Boolangga) 六祖寶實 (Boosi) 合せて五祖の子孫であつて、太祖から言へば、皆近親の従父及び従兄弟達である。それらが神に誓つて太祖を殺さんとしたといふ。また太祖が始めて兵を起すや、三祖索長阿の第四子龍敦が薩爾滸部長諸密納に讒して之を離背せしめたのであつて、その離間の語には「今明國尙欲助尼堪

外蘭、築城於嘉班、令爲滿洲主。況哈達萬汗又助之。爾何故順淑勒貝勒耶」とあつたといふ。淑勒貝勒 (Sule Beile) 即ち聰睿貝勒とは太祖の尊稱であつて、實は本名奴兒哈赤 (Nuraci) とあつたのを、實録の記者が強ひて改作したのであらう。實録によると、なほこの萬曆十一年中、六祖實質の子康嘉 (Kangsiya) は餘人を語らひ、哈達 (Hada) 國の兵を請ひ、渾河部の兆嘉 (Joogiya) 城主理岱 (Jidai) をして導引せしめ太祖所屬の瑚濟 (Huji) 寨を劫して去つたとし、翌十二年正月には太祖親ら理岱を征し、「理岱は我が同姓に係る。乃ち他人を引いて我を害す。我豈甘心せんや」といひ、即ちその城を陥れたが、なほ且つ「理岱の死を宥して之を養つた」とある。理岱は族人でも稍と遠いものであつたが、もつと近親で太祖を謀るものがあつたので、實録には同じ萬曆十一年中のこととして左の如くある。

有長祖次祖三祖六祖之子孫、同誓於廟、欲謀殺太祖。至夏六月晦暝之夜亥時、方豎梯登城。太祖心神不寧、因起著衣、帶弓矢、持刀、登城觀之。賊見太祖立城上、皆墜城而遁。九月内、賊乘夜陰晦、拔太祖住宅柵木潛入。時有大名湯古哈 (Tanggha) 四顧驚吠。太祖覺之、將二男一女匿於櫃下、乃執刀大呼曰、「何處賊、敢來相犯、汝不入、我即出、毋得退縮。」故將刀柄擊窗有聲、作由窗而出之勢、仍由戸出。賊見出勢勇猛、皆遁去。時有部落帕海 (Paha) 睡於窗下、被賊刺死。

これは暗夜の刺客であつて、叙述は極めて精細である。

前に述べた薩爾滸部長諾密納と共に、萬曆十一年諸部に先んじて率先來歸した蘇子河部嘉木湖寨主噶哈善は前から太祖の相識の穆通阿の子で、清初の功臣額亦都巴圖魯 (Eidu Baturu) の從兄である。だからその來り通ずるや、太祖は大いに喜び、同母妹を以つて之に妻せたが、翌十二年に至り、例の三祖の子龍敦は太祖の庶母の弟薩木占 (Samjan) を誘つて之を殺さしめた。實録にいふ。

龍敦唆薩木占曰、薩木占乃太祖庶母之弟

「爾妹見在我家、汝可與我同謀、殺噶哈善、」

噶哈善太祖妹夫

薩木占聽其言、帶領族人、遮殺於

路。太祖聞之、聚衆、往尋其屍。兄弟中、皆與龍敦同謀、竟無同住者。太祖帶數人、往尋之。族叔尼瑪蘭城主梭敦止之

曰、「族人若不怨汝、焉肯殺汝妹夫、汝且勿往、恐被人害。」太祖大怒、遂披甲躍馬、登城南橫崗、彎弓盤旋、復回城內、

大呼曰、「有殺吾者、可速出。」族人皆懼、無敢出者。太祖取其屍、竟納入室中、解衣服靴帽、厚葬之。

尼瑪蘭 (Nimalan) 城主梭敦 (Lengdon) は即ち五祖寶朗阿の子である。前後の記事を併せ考へると、同じ六祖の中でも、

四祖覺昌安即ち太祖の家に特に惡感を持つてゐたのは、長祖・次祖・三祖及び六祖の子孫で、殊に三祖索長阿の四子龍敦がその反謀の中心であり、五祖の子孫は案外太祖に好感を抱いてゐたものと見える。三祖の次子武泰 (Ute) は後にいふ哈達 (Hada) の萬汗 (Wan Han) の女だといふから、或はこれらが太祖の當面の敵手であつたかも知れぬ。

實錄にはなほこの年四五月の交連りに刺客の來り襲つたことを記して左の如くある。

四月内、太祖睡至夜半、聞門外有步履聲、即起、佩刀執弓、將子女藏於僻處、令后故意如廁、太祖緊隨、以后體蔽已身、潛伏於煙突側、后即回室。是夜陰晦、忽電光一燭、見一賊將近。太祖以刀背擊仆、喝令家人縛之。家人洛漢 (Loohan) 等言、「縛之何用、當殺之。」太祖暗思、賊必有主、若殺之、其主必以殺人爲名、加兵於我、自料、兵少難敵。乃佯言曰、

「爾必來偷牛、」其賊答以偷牛是實、並無他意。洛漢又言、「此賊實害我主、詐言偷牛、可殺之以戒後人、」太祖曰、「此賊實係偷牛、諒無別意、」遂釋之。

五月、太祖夜宿、有侍婢不寐、在竈燃燈、忽燃忽滅。太祖見而疑之、乃著短甲、於服內持弓刀、作外便狀、至煙突側。

見排柵空處、隱々有人形、露其首、恍惚不真、詳視之則無矣。時天色甚晦、忽有電光、見賊已逼近。遂發一矢、被賊躲過、中其肩衣而走。復追射一矢、穿賊兩足、以刀背擊其首、昏絕於地、遂縛之。有弟兄親族俱至、言「撻之無益、不如

殺之。太祖曰、「我若殺之、其主假殺人爲名、必來加兵、掠我糧石、糧石被掠、部屬缺食、必至叛散、部落散則孤立

矣、彼必乘虛來攻、我等弓箭器械不足、何以禦敵、又恐別部譏我殺人啓釁、不如釋之爲便、」遂縱之、其賊名義蘇。

この邊、實録の記事は極めて簡略であるから、斯くの如き頻繁な來襲の叙述は殆ど實録の大半を蔽ふの概がある。これで見ると、嘗に刺客が來り襲ふのみならず、家内に内通のものまであつたのである。さうして叙述は頗る詳細であるが、かやうなことは他人が知るべき筈はないから、いづれも太祖自身の口述に基づいたものであらう。しかも太祖は能くその敵を知つてゐたやうであるが、實録の文面では何者であるか一向明白でない。敵は果して何者で、何のために太祖を害しようとしたのであらうか。

初め私はこの難問を解して、やはり故の王杲・阿台の遺勢に關係あるものではないかと疑つた。といふわけは、王杲・阿台はその生時この方面の大勢力であつて、寧古塔貝勒もその支配に屬してゐたものゝやうである。若し明の記載に出て來る王杲の與黨阿哈納が六祖實實の子阿哈納(Ahana)に間違ないとすれば、その事はなほ更確實である。阿哈納のことは明の記載に頻見してゐる。今試みに茅瑞徵の東夷考略<sup>建州</sup>を引けば、萬曆三年春の條に、明の副總兵曹簠が市夷を買收して遁走中の王杲を窮迫したことを記して、

副總兵曹簠厚市夷賞、謀杲匿酋阿哈納寨、勒精騎馳剿、得二十六級。杲僞以蟒掛紅甲授哈納脫走、將投土蠻。

とあり、その古埒城<sup>(古樓)</sup>の本據を失つた王杲は走つて興京の阿哈納の寨に匿れ、後に之を身代りに仕立てて遁けたのであつて、阿哈納は恐らく王杲より奥地にゐたその隨一の麾下である。さうして清の實録にはこの太祖の從父に當る六祖實實の次子阿哈納が薩克達(Sakta)部長巴斯翰巴圖魯(Bashan Baturu)の妹を娶らんとして大騒動を起した始末を傳へてゐる。事實の間に聯絡はないが、その無爲の酋に非ざることを示し、この姓名・時代・地域を同じうする阿哈納が同一人なる可能

性は高い。寧古塔貝勒と王果・阿台父子とはかういふ關係にあつた。然るに太祖の卍場・他失は之を裏切つて明に滅ぼさせたのであるから、その餘黨が之を恨んで明の庇護による太祖に害を加へんとしたものと考えられるからである。

しかしなほ考へて見ると、建州左衛の寧古塔貝勒即ち愛新覺羅六王の子孫が必ずしも悉く建州右衛の王果の屬下だつたとは見做し難く、實際その反證もあるのである。明の瞿九思の萬曆武功錄卷一一 東三邊王果列傳によると、萬曆二年十月王果が古埒山城で明將李成梁に撃破せられた時、明軍の喜んだのは言ふまでもないが、女直の酋長にも之を歡呼したものがあつたのであつて、その事は次ぎの記事に明白である。

而旁近寨夷大疼克・三章等尤大喜、並羅列山前、跪起歡呼、「頼將軍令、毋擾我寨、我寨以果故、久勞苦、不敢近邊、今果寨盡破、滅亡所遺、豈非天賜哉、」叩頭謝。

なほ同書の王台列傳によると、更にその後、この騷亂の故に一時明の市賞が絶えたので、その再開を哀願した諸酋の名を擧げて、「建州人大疼克・三章・忙子・孛羅卜花・色失・木同哈・那米納等叩關悲號」とある。その大疼克は大明神宗實錄萬曆七年九月壬子の條に「遼東建州左衛等女直夷人都督等官大疼克等共一百二十六員、備馬一百二十六疋、赴京朝貢、給賞如例」と見える建州左衛の都督であり、三章は前に述べた太祖庶母の弟薩木占であらう。忙子・孛羅卜花は審かでないが、色失は後に出て来る河北部の色失で、木同哈は嘉木湖寨主噶哈善の父穆通阿、那米納は薩爾滸部部長瓜喇の弟諾密納でなければならぬ。これらは大體王果の勢力を喜ばなかつた者どもである。寧古塔貝勒はその中に入つてゐないが、しかし彼等と雖も必ずしも皆王果に樂從しなかつたことは、ほど想像出來よう。否、實は奥地の左衛の人々は近邊の右衛の王果の勢力に壓迫されて、内心皆之を厭つてゐたのであらう。だから太祖の父祖も表面王果に従ひながら、却つて王果・阿台の討滅に一臂の力を貸したのであらう。

尤も寧古塔貝勒の中には、前述の阿哈納の如く、王杲に心服してゐたものもあつたであらう。随つてそれらが叫場・他失の後の太祖を迫害したかも知れぬ。けれども若しさうだつたとすれば、四祖覺昌安（叫場）即ち太祖の家が他の迫害を受けたのは、萬曆三年王杲擒殺の直後から起つた筈で、更に後十年の萬曆十一年阿台遭難の後にのみ始めてその事の生じたやうなのは少し變ではないか。

そこで私はまたかうも考へて見た。明の嘉靖の末から萬曆の初めにかけて、遼東邊外で最も猛威を振つたのは、明人の所謂開原南關の王台即ち清人の所謂哈達の萬汗（Wan Han）で、さしも建州の王杲・阿台も一時はその勢力下に屈してゐたやうである。少くとも萬曆三年王杲擒殺の後には王台の勢威は建州を籠め、渾江畔の王兀堂の勢力範圍を除き、渾河・蘇子河の流域まで悉くその權勢に靡いてゐたことは疑ないところである。東夷考略（建州）には

當是時、東夷自撫順開原而北、屬海西、王台制之。自清河而南、抵鴨綠江、屬建州者、兀堂制之。

とある。だから太祖の父祖叫場・他失のことを明人の記載には或は初め「王杲之奴」ともいひ、或は後に「王台所屬」ともいつてゐるのであつて、清の實録には蘇子河流域の寧古塔貝勒が早く哈達汗の力を借りて渾江畔の棟鄂部の侵掠を却けたことをも記してゐる。

哈達の強盛を記して明の王在晋の三朝遼事實錄（總略）<sup>（四）</sup>には少し誇張に過ぎるが、

部衆強盛、凡建州・海西・毛憐等一百八十二衛二十所五十六站、皆畏其兵威。于是悉得國初所賜東夷一千四百九十八敕、因創寨于開原靖安堡廣順關外住牧、以便互市、入貢即開原、所謂南關也。當是時、東夷酋首之黠者、隸其部下、無一人敢爲內地患。

といひ、東夷考略等には、も少し質直で、當時遼東が東は滿洲、西は蒙古に挟まれて岌々として危うかつた時、王台即ち萬

汗は東西二夷を隔絶して合するを得ざらしめ、最も明に忠順だつたので、「東陲晏然、耕牧三十年、台有力焉」といひ、更に筆を繼いで、

當是時、台所轄、東盡灰扒・兀刺等江、南盡清河・建州、北盡二奴、延袤幾千里、内屬保塞甚盛。

ともあり、滿洲實錄には

彼時、葉赫・烏拉・輝發及滿洲所屬渾河部、盡皆服之。凡有詞訟、悉聽處分。賄賂公行、是非顛倒、反曲爲直、上既貪婪、下亦效尤、凡差遣人役、侵漁諸部、但見鷹犬可意者、莫不索取。得之、即於萬汗前譽之、稍不如意、即於萬汗前毀之。萬汗不察民隱、惟聽譖言。民不堪命、往々叛投葉赫、並先附諸部盡叛、國勢漸弱。

と見えてゐる。後者は強ひてその晚年衰弱の時を諉つたものであるが、それにしても前半強盛の狀は窺ふに足る。灰扒・兀刺は即ち輝發(Hoifa)・烏拉(Ula)で、灰扒は輝發河、兀刺江は今の松花江である。二奴とは葉赫(Yehe)の東西二城の主遑家奴(清佳努 Cinggiyanu)・仰家奴(楊吉努 Yangginu)兄弟を指す。その萬汗の老衰して憂死したのは萬曆十年七月のこと、これより哈達の國勢の漸く傾くと共に、葉赫と清とが勃興するのであるが、清の實錄にはこの後ともに哈達の酋長に萬汗の名を用ひてゐる。

太祖の勃興は哈達の衰弱に乗じ、その羈絆を脱せんとする運動であるから、哈達との衝突は當然で、前掲の實錄本文にも、三祖索長阿の子龍敦が尼堪外蘭のことをいつて、「況哈達萬汗又助之」と見え、また六祖實寶の子康嘉が兆嘉城主理岱等と哈達國の兵を請うて來侵した由が見えてゐる。だから私は太祖が一族の迫害を受けたのも、或はその倔強を憎む哈達の使喚によるものではないかと考へたのである。しかし退いて一考すると、これも未だ甚だ落着かない。といふのは、大國哈達が後援したのなら、何故正々堂々と攻めて來ないで、密かに暗夜の刺客ばかり送つたか。また太祖が之に對して何故あつ

てあのやうに遠慮して誅殺を憚つたか。これは解けない謎である。

そこで最後に到達したのは、さうではなく、これはやはり一族中の勢力争ひだつたと見ることである。太祖の家は寧古塔六祖中の第四子の後で必ずしも全六祖の長たるべき地位に居なかつた。實録には四祖覺昌安は其の祖居の赫圖阿拉(Hetutala)地方に住すとあるけれども、それは決して自然の結果では無かつたのであらう。六祖の兒孫の中、たゞ叫場(覺昌安)・他失(塔克世)の父子二人のみ特に明側に著聞したのを以つて見れば、この兩人殊に父叫場の力量の勝れてゐたのを察知すべく、その特別の個人的力量を以つてこの父子は一族を率ゐてゐたのである。それは實録に見える覺昌安父子が碩色納(Sosenan)・加呼(Giyahu)の二族を滅ぼして、今の興京盆地を平けた話にも現はれてゐる。然るに萬曆十一年この兩人は俱に横死した。それこそ他の者に取つて多年垂涎の權力を奪回すべき好機であつたに相違ない。ところがその遺兒奴兒哈赤は弱年ながら倔強であつて決して人に譲らない。晉に譲らないのみならず、更に明から阿台の寨内の勅書や馬匹まで受領した。これが一族の嫉視を招き、やがて暗殺の企圖を惹起したものであらう。さう思つて見れば、上列の襲撃記事は凡べて疑點なく解釋出来る。一族内の暗闘であつたからこそ、深く懷中に入つての暗夜の襲撃があり得たのであつて、だから太祖は能くその敵を知り、しかもその反感を激するを恐れて痛くその誅殺を憚つたのである。若しこの時太祖が堪へず、一時の憤怒に驅られて誅戮を恣にしたならば、一族の暗闘は忽ち明闘となつて、寧古塔の地は忽ち骨肉相屠る修羅場となり、清朝興隆の基礎はこゝに覆へされたであらう。太祖は能くその事を洞察し、敵はたゞ一時の嫉妬に驅られて盲動してゐるのみであるから、實力を以つて之を抑へてさへ行けば、やがては皆同族のこと、我が大傘下の中心勢力となるべきものと達觀してゐたものと見える。それは空論ではなく、上掲の實録本文中にその證據があるのである。例へば最後の條に太祖が開蒙を懼れ、「又恐別部議我殺人啓蒙」と言つたとあるのは即ちその事を示し、部内の混亂が別部に乘すべき隙を與へるのを戒しめたものであ

り、また初めに族人龍敦が太祖の妹夫噶哈善を殺したのは太祖の個人的勢力を殺がんで爲めで、その時「兄弟中皆與龍敦同謀」とあり、族叔稜敦の言に「族人若不怨汝、焉肯殺汝妹夫」とあるのは、この骨肉相惡の狀を説いたものである。果してこの内輪の争は僅か二年にして、太祖の實力の確立すると共に平いだ。後々まで紛争の續かなかつたのは哈達の十分なる後援のなかつた確證である。

### 三

次ぎなる問題は太祖の遠交近攻の策略である。太祖の事業は初め専ら附近の諸寨を討平するにあつたが、その間にあつて萬曆十二年中には同族の不平を鎮壓し、同十四年には宿敵尼堪外蘭をも討取つたので、翌十五年齡二十九歳の時、始めて煙筒山下に所謂興京の舊老城を築いた。實録にはその年六月二十四日に國政を定め、凡そ作亂・竊盜・欺詐は悉く嚴禁を行つたとある。實録に精確な日附の出て來るのはこれが最初である。かくてこれより専ら對外發展の道程に上るのであるが、實録には戦争攻伐の外、外交的記事は殆ど希で、その顛末を詳にし難い。

たゞ時々外部との通婚の記事があり、萬曆十六年四月には哈達國の萬汗の孫女阿敏哲々(Amin Jele)をその兄代善(Daišan)が送つて來たので、太祖は之を迎へて妃となしたことを傳へ、更にその後左の如く見えてゐる。

初太祖如葉赫。其國主揚吉努見其相貌非常、言「我有小女、堪爲君配、待長締姻」。太祖曰、「若締姻、吾願聘汝長女。」揚吉努答云、「我非惜長女不與、恐不可君意、小女容貌奇異、或者稱佳偶耳。」太祖遂聘之。揚吉努故後、子納林布祿(Narimbulu)於是年九月内、親送妹于歸。太祖率諸王大臣迎之、大宴成婚、即天聰皇帝母也。

この話の前半は非常に不自然であるから、恐らく文飾があつて、實は大國の主揚吉努は太祖の懇請を辭しかねて、己むを

得ずその未熟の少女の婚約を許したといふことなのであらう。いづれにしてもこの同じ十六年に太祖は哈達・葉赫兩國の女を娶つたわけであるが、それについては少しく説明を要する。

開原南關の哈達のことは前に既に述べた。葉赫は即ち開原北關で、哈達の敵國である。哈達が明に忠順だつたのに反して、葉赫は最も桀驁であつたから、その祖父は明の後援を得た哈達のために討ち滅ぼされた。乃ち哈達の萬汗は葉赫の遺兒清佳努・揚吉努兄弟をその傘下に收め、揚吉努に女を與へて之を綏撫した。しかも清・揚兄弟は相當の豪傑だつたので、密に葉赫復興の機を窺ひ、萬汗の老衰に乗じて暗躍を始め、建州の阿台とも聯絡し、萬曆十年萬汗の死と共に忽ち勢力を恢復し、次第に地を拓いて哈達に迫り、今度は却つて哈達が葉赫に壓倒されさうになつた。堪りかねた明の總兵李成梁等は翌十一年二月一方阿台を古埒山城に屠ると共に、他方その十二月兵を開原城内に伏せて、清揚兄弟を誘殺してしまつた。これで桀驁なる葉赫はまた衰へ、忠順なる哈達のみが明の後援に頼つて榮える筈であつたが、實はさうはならなかつた。といふわけは、哈達の後繼にその人がなく、徒に内紛を續けてゐる間に、葉赫では清佳努の子布齋(Bu-ai)及び揚吉努の子納林布祿(Naimbulu)が俱に英雄で、忽ち勢力を盛り返したからである。そこで李成梁は萬曆十六年三月再び大軍を出して葉赫の本據を襲ひ、敵の抵抗は頗る頑強であつたが、辛うじて之を屈服させることが出来た。かういふのが當時の實情である。

されば葉赫東城の主揚吉努は誠に當時の大酋ではあつたが、その完全に獨立したのは哈達の萬汗の衰逝した萬曆十年前後の頃で、殺されたのが翌十一年十二月のことであるから、その間二年を多く越えなかつた。一方萬曆十一年はその春二月に太祖の父祖が殺され、夏五月に太祖が擧兵した年であるから、若し太祖が葉赫に往いて揚吉努と婚約を締したとすれば、やはりその頃のことではなければならぬ。それはその時揚吉努の言に「我有小女、堪爲君配、待長締姻」とあつたといふが、後の太宗皇帝の母、孝慈皇后なる孟古哲々(Monggo Jele)は年十四にして太祖に歸し、萬曆三十一年壯歲二十九で崩じたと

いふのであるから、萬曆十一年にはまだ九歳の幼齡だつたわけで、誠によく話が合ふのである。

だからこの話に誤ないとすれば、太祖は舉兵と同時に遠く葉赫に往つてその大酋と締盟した。何のためかといふと、無論共同の大敵哈達を牽制せんがためである。言ふまでもなく、當時は太祖が撫順の關外、蘇子河上の興京方面に居り、葉赫が開原の北、葉赫河上の葉赫站附近にゐたのに對して、哈達はその中間の開原の東、哈達河上の王杲城にゐたのであつて、初めは中央の哈達が強盛で他を壓服してゐたのが、こゝに至つてその衰頹に乗じ、南北の兩敵が輻輳したのであるから、その兩者が手を握るのに不思議はない。明の姚希孟の建夷授官始末によると、この事を述べて、「成梁業以王杲勅書、界奴兒哈赤、然初起孱弱、因結婚北關、以壯聲援」と見えてゐる。固より葉赫は大國で、太祖はまだ勃興の當初であるから、この締盟は決して對等のものではなく、寧ろ保護者と被保護者の關係にあつたのであらう。それにしても自ら進んでこの遠謀を畫したらしい二十五歳の太祖の膽略を見るべきである。

さうして益々地歩を固めた太祖は萬曆十五年六月には親ら兵を率ゐて哲陳部の阿爾泰 (Artai) を征して之を滅ぼし、八月には渾河々北の巴爾達 (Barta) 城を取り、遂に進んで洞 (Dung) 城を陥れてその城主札海 (Jalai) を降した。皇清開國方略<sup>卷二</sup>には阿爾泰のことを特に哲陳部長と記してゐる。これらは園田一龜氏の考證にも明かな如く、太祖初期の征戰の中、始めて明人の記載に對應の記述を見出すもので、阿爾泰は明人のいふ阿郎泰に當り、札海は明人の張海に當る。明人の記載の中ではやはり萬曆武功録が最も詳かであるが、今姑くその簡要を採つて、彭孫貽の山中聞見録<sup>卷一</sup>を引けば、太祖が漸く東方に自立したことを述べた續きに左の如くあり、なほ頗る委曲を盡してゐる。

漸北侵張海・色失諸部蠶食之。初建州貢樊 (夷) 色失殺其弟劄力、遺孤英革養於色失、長報先人之怨。於是、弑色失及其妻子四人、僅遺一子咬郎、〔咬郎〕得逃遁阿郎泰寨。英革知之、往投太祖。〔太祖〕合兵圍阿郎泰、阿郎泰殺咬郎、

求解免。太祖竟焚其室廬、掠其人畜乃去。河北部張海亦有怨於太祖、盡携家室奔海西、投都督歹商。太祖以爲歹商何爲匿我仇讐乎。遂大掠海西、……當是時、海西北關酋卜寨・那林孛羅方聯西人以兒鄧、攻歹商急。太祖怨歹商。因合那卜二酋圖歹商。李成梁發兵圍那酋寨。二酋請降。「成梁」爲平海西二關貢勅、以和諸酋、令歹商逐張海還建州、以弭其釁。已而太祖求婚於歹商、遂罷兵、……

これらの記載がかく割合詳細なのは、これら諸部が明邊に近く、明人の知見に入つたが爲めであらう。河北部といふのは渾河の北方の部の意である。都督歹商は哈達の萬汗の孫代善 (Daišan) で、海西北關の酋卜寨・那林孛羅は即ち葉赫の布齋・那林布祿であり、李成梁が之を伐つたといふのは前にいつた十六年三月の征戰のことに外ならぬ。西人以兒鄧 (Biehe) は蒙古の酋長の名である。これで見ると、太祖が札海を逐ひ、札海が代善に投じたので、太祖と代善との間に釁を生じたのを明の調停で和解し、太祖が婚を求めたから、代善がその妹を送つて太祖に妻したのである。萬曆武功録<sup>卷一</sup>一 奴兒哈赤傳には之を謂つて、

其後歹商逐張海。奴兒哈赤遂願與歹商通婚媾。始奴兒哈赤與北關、故夙昔姻親、終背棄去、幸一日以請婚故、羽翼歹商、於百年之故誼、寧不媿快乎。

とある。

しかしそれは明人一面の解釋で、實際は太祖勃興の勢力が次第に哈達を壓迫し、遂にこゝに至つたものなることは争へないであらう。萬曆十六年は蘇完 (Suwan)・棟鄂 (Donggo)・雅爾古 (Yargu) 等今の渾江畔の諸部が擧つて太祖に投じ<sup>(16)</sup>、太祖の勢力は直に鴨綠江北までを籠蓋したから、哈達も已むなく締婚したのであらうし、宿敵の哈達が太祖と結ぶを見ては、葉赫も獨り安閑たるを得ず、急に往昔の婚約を生かしてその小女を送つて來たのであらう。例の建夷授官始末には、「又令

歹商以姉妻那林孛羅、以妹妻奴兒哈赤、因以連絡諸夷」とも述べてある。さればこの時代善の姉もまた納林布祿に嫁したのであつて、かくしてこの年の二重三重の政略結婚は成り、葉赫と哈達は勿論、太祖と葉赫・哈達との關係も愈々深く結ばれることになった。この關係は明もまた認可勸奨したところであつて、武功録の歹商傳には「奴兒哈赤求婚歹商、漢使歹商許之、欲歹商內倚中國、而外以姻重、皆寢北關之謀也」とある。太祖の位置の漸く重くなつたことを見るべきである。時に太祖は壯齡三十歳であつた。

話は少時哈達のことに移る。哈達の萬汗が萬曆十年七月に死ぬと、その長子扈爾漢(Hürgan)が嗣いだが、八月にしてまた死し、長孫代善に及んだ。初め萬汗には六子があつたが、仲叔は皆天死し、長子扈爾漢の他にはたゞ季子蒙格布祿(Menggebulu)のみが残つた。明は萬汗の大功を嘉みして扈爾漢・蒙格布祿兩人を都督僉事に任じたので、是に至つて蒙格布祿は更に左都督龍虎將軍を加へられ、柔弱なる代善と相並んで哈達に主たることになつた。蒙格布祿の母溫姐は北關葉赫の清佳努・揚吉努兄弟の妹である。別に萬汗姦生の子に康古嚕(Kangguru)といふ者があり、嫡兄扈爾漢に憎まれて葉赫に遁れ、清佳努の女を娶つてゐたが、兄の死に乗じて歸り來り、父の遺妾溫姐を妻とし、溫姐の子猛格布祿を助けて代善に壓迫を加へた。こゝに及んでさしも萬汗の遺業も三分せられて、哈達の霸權は地を拂つて失せた。この間清の太祖は未だ雌伏して隙を窺ふに過ぎなかつたが、北關の二酋は不斷に南關のことに干渉し、往々蒙古を誘つて之を侵掠した。明は南關の擁護に苦しんだが、十六年の葉赫討伐の後漸く康古嚕・溫姐を收撫し、蒙格布祿・代善と和せしめた。然るに康古嚕・溫姐は間もなく相尋いで死し、葉赫の後援を頼んだ蒙格布祿は益々明の庇護による代善を壓迫した。是より先き北關の納林布祿の妻は代善の姉であつたが、是に至つて布齋もまたその女を以つて代善に許したので、代善は北關の布齋の許に赴いて妻を受け、因つてその姉納林布祿の妻を訪れんとして途中で暗殺された。時に萬曆十九年正月のことで、勿論北關の二酋の陰謀で

ある。滿洲實錄<sup>卷一</sup>の哈達國の系譜を述べた條に、「萬汗卒、子扈爾漢襲位、八月而卒、其弟康古嚕襲之、康古嚕卒、弟蒙格布祿襲之」といひ、代善の襲位を全く認めてゐないのを見ると、代善の實力は初めから疑はしいものであつたかも知れぬ。とも角、かくして哈達は始めて萬汗の死後、蒙格布祿一人の天下となつた。しかしその勢は全く衰へ、蒙格布祿は葉赫に完全に制馭せられ、明に對しても修貢惟れ謹しむのみで、南關哈達は愈々孤にして益々弱くなつた。

清の太祖が決然として北關葉赫と絶ち、南關哈達をその手中に收めんとしたのは正にこの時のことである。しかし直接の原因は葉赫の酋首が進んで太祖の妻を横奪したことから起つた。その事は清の實錄には見え、明の三朝遼事實錄<sup>首卷</sup>總略に最も詳かであつて、その歹商（代善）の横死を叙した續きに左の如く見えてゐる。

時奴兒哈赤妻明安姐方歸、哭兄歹〔商〕。亦爲卜寨所擄取。索之再三不與。轉開原爲代索、亦不與。於是、奴與北關絶。同じことを山中聞見錄<sup>卷一</sup>に「建州日與北關二酋構、訐訟中朝、稱妻安明姐爲那酋所搶、請發兵勦捕。概報罷。然太祖竟殺卜寨」とあるのは、その開原に訴へて代索を請うたことを謂つたもので、これには妻を奪つたのが卜寨（布齋）でなくて、那酋（納林布祿）としてあるが、卜寨は性來温和であつて、那酋が獨り兇猛だつたやうであるから、恐らく後者の方が正しく、後に殺されたのが卜寨であるところから誤つたのであらう。安明姐は前に言つた萬汗の孫女阿敏哲々（Amin Jele）であるから、これも安明姐が正しく、明安姐はその顛倒である。阿敏哲々は清の記録には前述の萬曆十六年四月にその歸嫁したことが見えてゐるだけで、その後子供を生んだことも、死んだことも、絶えて出て來ないのであるから、この歸嫁後二年七月にして奪ひ去られたといふことに間違ひはあるまい。たゞ不思議なことは、この大不祥事が清側の記録には絶えて見えなばかりではなく、後に太祖が葉赫と争つて敵の罪を數へ、あらゆる怨言を並べた中にも嘗て一言も言及してゐないことである。思ふに、これは論ずるには餘りに醜態なので、その事實を凡べて抹殺隱蔽してしまつたためではなからうか。

兎も角これは偶然な事實ではなく、葉赫も太祖も俱に共同の大敵哈達の事實上の解體を見た後には、今や相互の利害は衝突し相提携出来なくなつたことを示すものでなければならぬ。果してこの年から、實録の文面でも、葉赫は連りに悪言を放つて太祖に迫つて来るのである。葉赫だけでなく、當時の海西諸部その他も悉く敵に加はつた。

#### 四

明人の所謂海西諸部の代表は、清初の所謂呼倫 (Hulun) 國の四部即ち烏拉 (Ula)・哈達 (Hada)・葉赫 (Yele)・輝發 (Hoifa) が是れである。その中、今の吉林の北烏拉街に據つた烏拉が呼倫諸部の大宗家であつて、開原南關の哈達はその一分家に過ぎなかつたが、烏拉は明邊に遠くして餘り知られず、哈達が却つて顯はれてゐた。開原北關の葉赫や輝發河上の輝發は寧ろその被管であつたが、こゝに至つて葉赫の勢は最も強く、殆ど他の諸部に號令するの概があつた。されば萬曆十九年葉赫と太祖との通好の斷絶するや、葉赫東城の主納林布祿は直に四國の名義を以つて使を遣はして割地の要求をして來た。太祖は勿論之を峻拒したが、その要求せられた土地の額勒敏 (Elinin) 及び札庫木 (Jakumu) の地は恐らく英額河畔の哲陳部及び渾河畔の渾河部の故地であつたらうといふことは嘗て論じた通りである。<sup>19)</sup>

ついでその年の中に葉赫・哈達・輝發三國は會議して、再び太祖に威嚇問責の使を送つたといふが、その納林布祿の使節の言葉に、「昔索地不與、令投順不從、兩國若成仇隙、只有我兵能踐爾境、諒爾兵敢履我地耶」とあつたといふのから見れば、昔に割地の要求をしただけでなく、實に降服を求めて來たのである。この年太祖は兵を遣はして長白山の鴨綠江部即ち今の鴨綠江の上流地方を收服したので、之に危虞を感じたのであらう。その東隣長白山下の珠舍哩 (Juseri)・訥殷 (Neyen) 兩路が葉赫の兵を引いて滿洲の東界、洞 (Dung) の寨を劫して去つたといふ。この洞寨は或は今の輯安の通溝即ち洞溝の方

面であつたかも知れぬ。かくて葉赫は遂に實力に訴へて雌雄を定むることに決し、翌々二十一年六月葉赫・哈達・烏拉・輝發四國は兵を連ねて太祖所屬の瑚卜察 (Hubca) 寨を犯したが、その九月所謂九國の大軍を提けて殺到した。九國の師とは葉赫國主布齋・納林布祿・哈達國主蒙格布祿・烏拉國布占泰 (Bujantai)・輝發國主拜音達哩 (Bairdari)・嫩河蒙古科爾沁 (Korcin) 國主翁阿岱 (Ungaradai)・莽古思 (Mangus)・明安 (Minggan)・錫伯 (Sibe) 部・卦勒察 (Guwalca) 部、及び珠舍哩路主裕楞額 (Yulenge) 訥殷路主搜穩 (Seowen)・塞克什 (Sakai) の兵合せて三萬である。科爾沁の翁阿岱は今の科爾沁右翼中旗 (圖什業圖王旗) の祖で、明の記載に西虜恍惚太として現はれるもの、莽古思は左翼中旗 (達賴罕王旗) の祖、明安は左翼後旗 (博多勒噶台王旗) の祖である。太祖は之を迎へて古埒山下、札喀野 (渾河畔、下夾河) に粉碎し、敵帥の布齋を陣斬し、布占泰を陣擒した。滿洲實録にはその効果を讃へて、「是戰也、殺其兵四千、獲馬三千匹、盔甲千副。滿洲自此威名大震」とある。事實この一戰こそ清朝興廢の運命を決したもので、これより後、太祖の前途は割合平安なるを獲たのである。たゞこの時、敵は主力の葉赫のみならず、滿洲の大半を結聚し、それに蒙古の一部まで加へて、反清朝の大聯盟を作つたのに反し、太祖はたゞ孤軍を率ゐて奮闘した感がある。しかしこれは必ずしも葉赫の外交が成功し、太祖の調略の失敗した結果ではない。新興滿洲の壓力が餘りに強く、あらゆる在來の勢力に危險を感じしめた爲めの故である。否、私はこの際に於いても、太祖の遠交近攻の策が非常に巧みに行はれてゐることを感得せざるを得ない。それは西隣蒙古の強部が悉く敵に加はらなかつたからである。

當時の東蒙古には今の熱河の方面に朵顏 (Doyan) といはれた喀喇沁 (Haracin) 部の遠祖が居り、その東方、遼西の邊外に近く挿漢兒即ち察哈爾 (Cahan) 諸部があり、その頭首の圖們札薩克圖汗 (Tuman Jasaku Han) は明人には土蠻と呼ばれ、成吉思汗の嫡統として勢威四隣に震つた。かの李成梁の嫡子李如松を捕殺したのも此の人である。察哈爾の北には東

方遼河の西岸に近く、泰寧・福餘の衛人と謬られた喀爾喀巴林 (Barin) の速把亥 (Subahai)・妙花 (Caohua) 兄弟等が居り、更に北方には嫩江流域にかけて好兒趁即ち科爾沁部の諸酋がゐた。その中、科爾沁部は東北に偏し、女直と關係が尤も深かつたので、海西諸部の聯合に加はつたが、その南方の諸強部は反清朝の聯合には加はらなかつたのである。それではこれらは元來東方の滿洲とは關係がなかつたのかといふと、決してさうではなく、かの強酋王杲・阿台等は常に土蠻・速把亥と聯絡してゐたのであり、その圖們汗の兵は嘗て東進して輝發河上の輝發城まで包圍攻撃したことさへあつた。<sup>(20)</sup> 葉赫・哈達が蒙古と聯携のあつたことは前述の通りで、萬曆武功錄<sup>卷一</sup>によれば、その歹商傳には、萬曆十六年前後の頃、那林孛羅が奴兒哈赤をして北虜に通ぜしめたといひ、同じく奴兒哈赤傳には同じ頃奴兒哈赤が北虜怱忽大と聲勢相倚つたともある。

稍々後の例ではあるが、熊廷弼の審進止伐虜謀疏<sup>(畫一)</sup>によれば、萬曆三十六七年の頃、「奴酋又會合鼐達子、約於朝貢夷人回巢日、興兵犯搶」などいふ語があり、その頃になると、太祖と蒙古との關係は滿文老檔などにも色々出て来る。更に後のことではあるが、清の實錄の傳ふところによると、萬曆四十七年十月圖們汗の曾孫蒙古察哈爾の林丹汗 (Tindan Han) が太祖に與へた書の中には明かに「先時、吾二國使者常相往來、因汝使捏言吾之驕慢、告汝以不善之言、故相絕耳」とあつて、確に舊時は互に往來通好してゐたのである。

もつと著しいことは喀爾喀 (Halha) との交通である。實錄によると、同じき四十七年六月の條に、蒙古の大酋喀爾喀の齋賽 (Zaisai) を捕へたことを傳へて左の如くある。曰く、

帝<sup>(太祖)</sup>夜夢天鵝鵠及羣鳥往來翱翔、羅得一白鵝鵠、執之聲言、「吾擒得齋賽矣」。隨呼而覺、<sup>齋賽蒙古之長、與帝有隙、常思擒之、故夢中云</sup>將此夢語后妃、后妃曰、「齋賽爲人如飛禽、何以擒之。」次日、復語諸王大臣、諸王大臣對曰、「此夢主吉、蓋天將以大有聲名之人、爲吾國所獲、故爲之兆也。」

と、先づその夢兆を喜び、さてその月二十五日愈々鐵嶺城を陥るゝや、蒙古喀爾喀部の齋賽等が兵萬餘を領して、來つて城外に伏し、我が兵を狙撃したが、我が兵は兼ねて憚る蒙古兵と戦端を開くを懼れ、躊躇して進まなかつたのを太祖は叱咤して之を襲はしめ、遂に齋賽を擒にしたといふ。

我兵一見、即出城、知是蒙古、欲遽戰、又無上命、不戰、即吾人已被殺、但攝其後而行。帝出城見曰、「何爲不戰、可急擊之。」大王曰、「今一戰、恐貽後悔、」帝曰、「此兵乃齋賽兵也、吾與齋賽之恨有五、今又先殺吾人如此、何悔之有。」

諸王大臣遂領兵衝殺、敗其兵、追至遼河、溺死及殺者甚衆、生擒齋賽並二子、……諸王大臣俱奇之曰、「得擒齋賽、正應汗吉夢也。」

齋賽は前に述べた泰寧の速把亥の孫であり、こゝに帝とは正位後の太祖を指し、大王とは太祖の次子代善を指す。吾人は之を讀んで滿洲兵は從來殺されても蒙古兵に抗敵することを禁ぜられてゐたことを知り、太祖がこの時に及んで既にその力を信じ、機に乗じて一氣に敵の大酋を擒にした始末を悟る。この事實は大分後のことであるが、思ふに太祖は最初からかういふ方針で、蒙古を敵にすることを努めて避けてゐたのであらう。さればこそ萬曆二十一年に所謂九國の兵が來り襲つた時にも、蒙古の強部は敵に加はらなかつたのであつて、それは決して偶然のことではない。

太祖の兵はこれより長白山北を廻つて東滿洲に出で、その奥地を經營した。その間には朝鮮との交渉も漸く繁く、他方葉赫と必死の覇權を爭ひながら、二十七年には哈達を併せ、三十五年には輝發を滅ぼし、四十一年には烏拉をも併吞して、四十四年遂に汗位を正し、やがて明と戦端を開くに至つた。太祖の軍が始めて明軍と戦つたのは實に四十六年即ち天命三年四月のことであつて、葉赫を完全に滅ぼしたのは更に翌四十七年八月のことである。この間太祖の方針が最初より大國明との衝突を極力避け、之を無用に刺戟することさへも憚つて、専ら滿洲内部の統一に努力して來たことは、今更言ふまでもな

い。随つてその對明和親策にも頗る見るべきものがあり、後に出來た實録の記事はそれらの事實を掩蔽粉飾してゐるところが頗る認められるが、それらについては今一切觸れない。明が滿洲の警戒すべきを覺つたのは始めて萬曆三十五年以後のことであり、蒙古が之を感じたのは更に十年遅く、いづれも最早覺つても間に合はない時であつた。それらの事についてはいづれ筆硯を新にして別に説くであらう。

#### 四

たゞなほこゝに一言すべきは當時の形勢の變化である。以上は専ら太祖の人と爲りに即して問題を考へて來たが、時代の變轉は太祖の性格に係りなく、新機運の醸成を示してゐるのである。明末塞外の形勢の變化は先づその城郭の新築に現はれてゐる。實録を見ると、舊國烏拉は布占泰の祖父布顏 (Buyan) の時烏拉河洪尼 (Houni) の處に於いて城を築いて王と稱したとあり、輝發も拜音達哩の祖父旺吉努 (Wanginu) の時輝發河邊呼爾奇 (Hurla) 山に於いて城を築いて之に居ると見え、哈達は萬汗の叔父旺住外蘭 (Wangu Walian) の時に創まり、葉赫も清佳努・揚吉努兄弟が各一城に居り、哈達人多く之に歸すとある。その他城寨の記事は王杲・阿台の古埒城でも、尼堪外蘭の圖倫城・嘉班城でも、既述の如く頗る繁いから、滿洲の城寨は古來引續いてあるものだと思つてゐた。ところがこれはさうでないのである。それは少し考へて見れば直ぐ解ることで、顧みれば、明初の名酋で清朝の遠祖といはれる童猛哥帖木兒も金阿哈出も皆城寨らしい城寨は持つてゐなかつた。明の中頃の大酋でも李滿住も董山も決して城居してゐなかつたのである。<sup>21</sup> 滿洲にも勿論昔は城郭の整備した時代があつた。それが時と共に頽廢したので、遼東志<sup>一</sup>に引いた元一統志によると、これらの城寨を列舉した後で、「城皆渤海遼金所建、元廢、城址猶存」と見えてゐる。大體滿洲奥地の城郭は元明の際に廢棄せられたので、それでも明初奴兒干都司の

健在の頃にはまだ松花・黒龍の流に沿うて城寨の列置せられてゐたことは人の知る如くである。それが明の中葉以後に至つて全く廢棄せられたのである。

明代に入つて城寨の廢止せられたのは獨り滿洲の奥地だけではない。内蒙古の南邊もまたさうであつた。西遼河の流域以南、今の熱河の地方や多倫・綏遠の方面などには、遼金元代には皆州縣が列置してあつた。それを明代に至つて廢棄したのである。それらの原因事情については今は論外に置く。かういふ地方にまた屋居定住の風が起り、城郭の萌芽の始まつたのは、近世の初頭、明末の嘉靖 (1521—66) 隆慶 (1567—72) の頃からである。

明の嘉靖中、今の綏遠の方面に俺荅 (Altan) と云ふ大酋が出て、四方を經略したが、明の亡命の徒で之に付き従ふものが多く、中にも丘富・趙全などいふものが最も俺荅の信寵を得て、之に屋居定住農耕等のことを教へた。明史<sup>卷三</sup> 韃靼傳にはその狀を傳へて左の如くある。

時富等在敵、招集亡命、居豐州、築城自衛、構宮殿、墾水田、號曰板升、板升華言屋也。趙全教敵、益習攻戰事。俺荅愛之甚、每入寇、必置酒全所、問計。<sup>(嘉靖三十四年)</sup>時邱富死。趙全在敵中、益用事、尊俺荅爲帝、治宮殿、期日上棟。忽大風、棟墜傷數人、俺荅懼、不敢復居。<sup>(嘉靖四十四年)</sup>

豐州は嚴密に言へば今の歸化城の東の白塔鋪で、板升とは蒙古語 *Batara* の音譯である。かくて俺荅も漸く華風に習ひ、隆慶四年 (1570) には遂に明と和親通好し、その居るところの城に明帝より名を賜ひて歸化といひ、寺を名づけて弘慈といつた。これが今日の歸化城の起原である。なほ俺荅はこの時刺麻教に歸依し、青海にも寺を建て、仰華寺といつた。今日蒙古の平沙中に居然として聳立する磚造の刺麻廟は恐らくこの頃から起つたものに相違ない。<sup>(23)</sup>

屋居定住化して來たのは西蒙古だけでなく、東部蒙古もまた同様だつたのであつて、熊廷弼の務求戰守長策疏<sup>(23)</sup>によると、

萬曆三十六七年の頃の遼西邊外ことを言つて、

往虜故窮餒、又馬於冬春草枯時、瘦如柴立、故我猶得一閒。近所掠人口、築板升居之。大酋以數千計、次千計、又次數百計。皆令種地納糧、料人馬得食、無日不可圖我。

といひ、また

嘗密聞外人言、向特怕虜殺我耳、今聞虜築板升以居我、推衣食以養我、歲種地、不過粟一囊草數束、別無差役以擾我、而又舊時虜去人口、有親戚朋友、以看顧我。我與其死於饑餓、作枵腹鬼、死於兵刃、作斷頭鬼、而無寧隨虜去、獨可得一活命也。不祥之語、以爲常談。

といつてゐる。これらは本來水草を逐うて轉徙する遊牧地帯の變貌である。況して從來から室居農耕に馴れてゐた滿洲の地の進化は想像に堪へる。

これらの事情を合せ考へて見ると、明の中葉まで城郭のなかつた滿洲の要地が俄に城塞化したのも、やはり嘉靖・隆慶の頃からでなければなるまい。さう思つて見れば、最初に挙げた烏拉・哈達・葉赫・輝發等の築城は必ずその創築のことを指してゐるのであつて、決して從來のものゝ改築ではない。考へて見ると、李成梁の女直討伐は殆ど皆攻城戰であつたが、その以前の諸將の征勦は皆たゞの掃蕩戰であつて攻城戰ではない。女直の築城が皆明末數十年間のことであつて、その以前のものでないことは明かではないか。想ひ起す、昭和十六年の初秋、滿鐵の島田好氏等と開原の東、西安縣（大疙疸）の古城址を踏査した時、山上は皆女直の古城址であつたが、草に蔽はれたその土壘は皆新築の如く截然としてゐたのを覚えてゐる。これらこそ葉赫十九城の幾つかと想つたが、今から思へばこれ皆明末の築造だつたのである。

今の興京老城は清の太祖の根據地であつて、その祖父四祖覺昌安がゐた赫圖阿拉（Hetu Ala）の地であるといふ。之に對

し、長祖德世庫の居城覺爾察 (Giorca) はその西に近く、加哈河を隔てた煙筒山下の東北麓にあり、次祖璦圖の阿哈和洛 (Ahalolo) は更に西方少しく隔たつて煙筒山の西北麓に近く阿伏洛にあり、三祖索長阿の和洛噶善 (Holo-gashan) は蘇子河の北今の永陵啓運山の麓にあり、同様にして五祖寶朗阿の尼瑪蘭 (Nimalan)、六祖寶實の章佳 (Jangsiya) は順次にその東方に連つてゐる。乃ち實錄に「六子六處、各立城池、稱爲六王、乃六祖也」とあり、注して「五城距赫圖阿拉、遠者不過二十里、近者不過五六里」とあるものであつて、これは私が滿洲實錄の挿圖を見てほゞ見當をつけ、後に高橋匡四郎氏等の實地踏査によつてその遺址を確かめられたところである。

なほ一つ興京老城の南方約一邦里、興京から望見出来る二道河子の丘陵上に一大古城址があつた。これは心無き英國の一行行者にも注意されたところであつたが、康熙乾隆の史臣には何の遺跡か解らなかつた。ところが最近當時の朝鮮の使臣申忠一の書啓 (建州紀程圖記) が出づるに及んで、これこそ清の太祖の最初の居城なることが判明し、稻葉君山博士によつて「興京二道河子舊老城」と名づけられた。かうなつて見ると、この舊老城こそ太祖が萬曆十五年に新築して同三十一年までゐたところ、今の老城は三十一年以後に移り住んだところなことは確かである。果してさうとすれば、その十五年より以前にはどこにゐたか、實錄の所傳に従へば、祖父覺昌安の時より今の老城にゐたことになつてゐるが、それは到底信すべき限りでない。申忠一の圖記によれば、太祖は以前世々に涉つて、もつと蘇子河の上流に當る今の興京新兵堡の方面にゐたことになつてゐるから、私はそれに従つて、六祖發祥の地を今の新兵堡の方面と推定して置いた。ところが實地踏査者である高橋匡四郎氏や渡邊三三氏はそのつもりで新兵堡の方面を普く探つて見たが、六城はおろか一城の痕迹もないとして私の推定を疑はれた。私も之には困惑したが、今から考へて見ると、それは恐らくそれでよいのである。六祖は西遷して今の永陵街の盆地に移るに及んで始めて各々一城を構へて割據したから、その城址は今に存するのであるが、その前新兵堡の方面にゐた

頃には未だ城居してゐなかつたのであつて、随つてその城跡はないのであらう。前に擧げた太祖が起兵の當初連りに刺客に襲はれた記事から察しても、到底堅固な城塞にゐたものとは思はれぬではないか。かく考へれば、愛新覺羅氏の諸城も皆明末に成つたのであつて、それより古いものではない。

なほ所謂興京の舊老城が三重の城になつてゐたことは、清の實録にも明人の記載にも見え、申忠一の圖記に最も詳かであるが、私達の實査したところによつても、烏拉街の北舊街の烏拉城址は平城であつたが、その中に土臺が多く、數郭に分たれて居り、輝發河畔の扈爾奇城や、哈達河畔の王昇城はいづれも山城で、山から麓にかけて皆二三重の構造になつてゐた。葉赫城は私は見なかつたが、萬曆武功錄<sup>卷一</sup>によると、萬曆十六年李成梁がその東城を攻めた時のことを記して、頗る精密にその狀を傳へ

其外大城以石、石城外爲木柵、而內又爲木城、城內外大濠凡三道、其中堅則一山特起、鑿山坡、周廻使峻絕、而壘石其上、城之內又爲木城、木城有八角明樓、則其置妻子資財所也、上下內外、凡爲城四層、木柵一層。

といひ、その堅固にして攻め難かつたことを叙べてゐる。さうして見ると、かゝる三重四重の構造は當時の女直の大城の特色だつたのである。その目的が難攻不落のためであるのは勿論であるが、一には當時の社會構造からして城内の住民を區別してゐたのである。例へば申忠一の書啓には舊老城のことを説明して、

一、内城内、又設木柵、柵内奴酋居之。

一、内城中、胡家百餘、外城中、胡家纔三百餘、外城外四面、胡家四百餘。

一、内城中、親近族類居之、外城中、諸將及族黨居之、外城外居生者、皆軍人云。

一、奴酋、除遼東地方近處、其餘北東南三四日程內各部落酋長、聚居於城中、動兵時、則傳箭於諸酋、各領其兵、軍

器・軍糧使之自備、兵之多寡、則奴酋定數云。

とあり、東夷奴兒哈赤考には恐らく後の老城のことを謂つて

内城居其親戚。外城居其精悍卒伍。内外見居人家、約二萬餘戸。北門外則鐵匠居之、專治鎧甲。南門外則弓人箭人居之、專造弧矢。東門外則有倉廩一區、共計十八照、每照各七八間、乃是貯穀之所。

とあり、明の黃道周の博物典彙<sup>卷二〇</sup><sub>四夷</sub>には同じ老城のことを述べて、

奴居内城、隨住夷人三百餘家、皆親黨心服、外城住夷約近萬餘家、皆是挑選精壯者、其遠近環塞散處之夷、約有數十萬之家。

と見えてゐる。即ち内城は一族親黨、外城は諸將及びその族黨、その外は軍人、城外は各種の匠役といふやうになつてゐたやうである。

今その社會組織のことを詳しく論ずる逡はないが、當時の女直社會はまだ大分民族的で、豪族が諸方に割據し、その稍々大なるものは城寨を構へて相争つてゐたのであらう。さうして偶々大酋長が出ると、これらの諸部を平定統合したから、扈倫四國や太祖のやうな主將のゐる大城は上述のやうな三重四重の構造になつてゐて、内城には主將及びその一族親黨が居り、中城にはこれら屬下の諸部長がその隨從を伴つて住んでゐた。右の記述によると、遼東に近い明の邊外の地方はその守備が緊要であるから除外されて、必ずしも主將の城中に勤務する必要はなかつたが、その他は北東南の三面で、各々三四日程といへば、殆ど當時の太祖の勢力圏内の凡べての諸部長が中城に參勤してゐた。勿論彼等の領土は別にあつて、そこには留守のものが領内を治め、參勤中の主人の必要物資をも不足なく調辨してゐたのであらう。さうして一旦緩急あれば、これら諸部長はその分に應じて兵を徵され、軍糧・兵器凡べて自辨で出兵に應じたのである。申忠一の書啓によれば、萬曆二十

四年の當時、これらの所謂諸將の數は「奴酋諸將一百五十餘、小酋（太祖の弟速兒哈赤）諸將四十餘、皆以各部酋長爲之、而率居於城中」と傳へてゐる。山中聞見錄卷一などに、太祖が明に對してその保塞の功を述べ、萬曆十七年には「今復身率三十二（二）酋保塞、鈴束建州毛隣等衛」といひ、同二十四年には「總五十三酋、捍邊勞苦」などと言つてゐるのも、之をいつたのであらう。軍人は諸將各とその領下の部民の精強なるものを選んで之に充てたのであらうが、主將の大城の外城にゐた軍人は大體主將直屬の麾下であつたであらう。即ち内城に主將の一族親黨が居り、外城にその精銳の麾下が居り、その間の中城に在勤の諸將を挾んで、之を制馭してゐたのである。李朝宣宗實錄卷六に載せた朝鮮の鄉通事河世國の報告によれば、萬曆二十三年當時の見聞を傳へて、

大槩目覩、則老乙可赤（奴兒哈赤）麾下萬餘名、小乙可赤（太祖の弟速兒哈赤）麾下五千餘名、長在城中、而常時習陣、千餘名各持戰馬、着甲、城外十里許鍊兵、而老乙可赤戰馬則七百餘匹、小乙可赤戰馬四百餘匹、並爲點考矣。

とある。城外にゐた鐵匠・弓箭匠等各種の匠役は最も有用な工人であつたが、それには女直人のみでなく、虜囚の漢人も雜つてゐた。河世國の報告には當時太祖の陣中にゐた特種技能者を數へて、

書員二名、瓦匠三名、則天朝命送之人云、而時方始役燔瓦。文學外郎則唐人投屬虜地、幾至三十餘年、而凡所通書、此人專掌云。甲匠十六名、箭匠五十餘名、弓匠三十餘名、冶匠十五名、皆是胡人、無一日不措矣。

と見えてゐる。文學外郎は別にいふ龍正陸のことである。この時初めて瓦を燔き始めたので、明に乞うて匠人を得たので、馴れると漸く女直人に代へる。他の匠人も皆さうであらう。

大城の守備はかくの如くであつた。さうして城外にもなほ各路一日程に出城のやうなものがあつた。殊に明に備へる西方に對してはその防備が嚴重を極めた。申忠一の書啓には、

一、奴酋自其家、南向大吉號里（朝鮮昌城の東）路一日程、北向如許（葉赫）路一日程、各設一堡。西向遼東路一日程、設十堡。將

則以酋長之在城中者定送、滿一年相遞。軍則以各堡附近部落調送、十日相遞云。

ともある。守禦堅固の状を見るべきではないか。勿論屬下の諸部長の城寨は概してもつと簡単なものであり、中には城寨も持たぬ小領主もあつたであらう。

思ふに蒙古は遊牧轉徙の民族である。それすら漢人の影響によつて屋居定住の風を獲た。況して滿洲は始めより狩獵漁撈に加へて農耕を營んでゐた。それは東夷考略などにも、「事耕紙、居處飲食有華風」とある通りである。それが長足の進歩を遂げたのであるから、その發展の著しいのは固よりである。それではどうしてさう急に發展を遂げたかといふと、それは明末に漢人の塞外流出が著しかつたからで、太祖の許にも龔正陸その他の漢人顧問がゐたのであるが、その事の詳論は他の機會に譲り今は略す。とも角かくして漢人の指導によつて城寨を作り農耕を發達させたのであつて、清初に既に或る種の莊園組織が發達してゐたことは、申忠一書啓の農幕や、李民寔の「建州聞見録」の農庄の記事でも能く解るが、殊にその後發展で審かである。それは勿論建州だけでなく、海西には一層著しかつたので、萬曆武功錄卷一によると、哈達が葉赫に侵された際、その莊子十所を焚かれたとか、猛骨孛羅・三馬兎の各十莊、歹商の一莊を焚いたとかいひ、兀蘇莊その他の莊名も見えてゐる。

なほ思ふに城寨の維持には政治的權力の他に、相當交通の發達と人口の集中とを豫想するわけで、今その確證は上述の諸記事以上には俄に得難いが、面白いのは輝發城陷落の際の逸話である。李朝實錄宣宗丁未年（萬曆三十五年）十月庚辰の條によると、咸鏡北道兵馬節度使柳珩の馳啓を載せて、その時回波（輝發）失陷の噂を傳へ、左の如くある。

當初老酋（祖太）欲圖回波。暗使精兵數十騎、扮作商人、身持貨物、送于回波、留連做商。又送數十人、依此行事、數十數

十、以至於百餘人。詳探彼中事機、以爲內應。後猝發大兵、奄至回波。內應者作亂、開門迎兵驅入、城中大亂、以至於失守。

噂の眞偽は保證の限りでないが、とも角この頃滿洲の奥地には輝發の山奥まで、數十人群隊の行商人が續々往來してゐて怪しまれないやうな社會狀態だつたのである。だから上述の如き大城寨の維持も出來たのであらう。

思ふにかくの如きは女直社會に於ける大變動であつて、事ここに至れば、その統合は單に一指導者の出現を俟つのみであつた。明の邊吏が之を目のあたりに視て、しかもその意義を覺らなかつたとすれば、確に彼等の無知怠慢の大失態である。間もなく一大痛棒を味つたのも當然の報酬と言はなければならぬ。私は未だになほ清の太祖の人物を確りと握り難いが、たゞ從來の名酋は一生かゝつて僅に旁近數部を平けたのみであつた時に、太祖は忽ちの間に全滿洲を統合した、そこにその大力量を見るべきであると思つたが、或はこれも幾分時代の大勢に乗じた好運があつたのかも知れぬ。

(1) 内藤虎次郎「清朝開國期の史料」(讀史叢錄一四四頁)。

(2) 園田一龜「明萬曆初期に於ける遼東女直の消長」(滿洲學報三)、「清太祖勃興初期の行迹」(滿洲學報四)。

(3) 和田清「滿洲諸部の位置について」(東亞論叢一)、「清祖發祥の地域について」(池内博士還曆記念東洋史論叢)、「清の太祖と李成梁との關係」(稻葉博士還曆記念滿鮮史論叢)、「明末に於ける鴨綠江方面の開拓」(史學雜誌三〇ノ九—一二)。

(4) 大明神宗實錄萬曆十七年九月乙卯條。なほ園田一龜氏「清太祖勃興初期の行迹」(滿洲學報四、一三二—六頁)参照。

(5) 黃道周「博物典彙」卷二四、四夷奴酋の條。

(6) 茅瑞徵「東夷考略」建州。彭孫貽「山中聞見錄」卷一。

(7) 同上。

(8) 熊廷弼「撫鎮塞地略疏」(籌邊須畫一)。なほこの事は他に詳論する機會があらう。

清の太祖興起の事情のついで 和田

(9) 錢儀吉「碑傳集」卷三、額宜都傳、清史稿列傳一二額亦都傳等。噶哈善の名は滿洲實錄にはたゞ噶哈善、武皇帝實錄には剛哈鄂とのみ譯してあるが、滿洲語の原文には *Gahsan Heshu* とあり、後の修正實錄には噶哈善哈思虎と譯出してある。然るに愛必達、弘毅公額宜都傳によると、「公少孤、無伯叔兄弟、唯一姑適嘉木湖業長穆通阿。至是往依焉。姑子哈思護傑士也。長於公、二人相得甚。居久之、適太祖高皇帝龍潛、有方往、過宿姑家。公與帝語、意相合、輒識爲眞人、欲從之、云々」とある。哈思護は即ち哈思虎である。

(10) この燈は詳しくは糠燈といひ、一種特別の土俗品であつた。(今西春秋譯滿洲實錄三七七頁註四八參照)。

(11) 稻葉岩吉「興京二道河子舊老城」康徳六年建國大學刊。

(12) 萬曆十六年の葉赫襲撃については、やはり萬曆武功錄に最も詳かであつて、その他明史二三八李成梁傳などにも「率師直搗其巢、卜寨走與那林李羅合、憑城守、城四重、攻之不下、用巨礮擊之、碎其外郭、遂拔二城、斬賊五百餘級、卜寨等請降、設誓不復叛、乃班師」といふやうに見え、明軍の全勝のやうであるが、姚希孟の建夷授官始末によると、同じ征戰を説いて「十六年、成梁與巡撫顧養謙提兵討北關、我師大敗、所失亡不可勝計、不得已駐師開原、」とあり、滿洲實錄には「成梁又於戊子歲、率兵攻納林布祿東城、失利而回」とあり、少くとも非常な苦戰だつたのである。

(13) 清史稿列傳一太祖孝慈高皇后。

(14) 清の太祖が萬曆十五年に興京の呼蘭哈達の南崗に舊老城を築いて居り、三十一年赫圖阿拉の老城に移り住んだことは、今では誰でも知るところで、六祖の分居した居城の位置もほど解つてゐる。葉赫は今の開原・伊通街道上の葉赫站の附近で東西城に分れてゐた。萬曆武功錄(卷十一)によれば、「兩寨相去皆數里」とあり、盛京通志(卷十五)などにもその説明がある。今の十萬分一圖を見ると、葉赫站の直南の平原中に一城址があり、少しく西南の山中にまた古城址がある。これが所謂東西城に當るのではあるまいか。たゞ記錄によると納林布祿の據つた東城の方が堅固のやうであるが、不完全な説明や地圖だけではよく解らない。哈達は開原の東方清河の上流で、尙陽堡から八棵樹・官糧窖を過ぎると、古城子といふところがある。こゝの山上に高句麗式の山城址があり、山下の平野に土壘を廻した遼金式の方城があるが、これは俱に哈達城ではない。河に沿つても少し東南に行くと王泉城といふ女直式の大山城址がある。王泉とは何で名づ

けたか知らないが、これが確に哈達城である。西方の往還から河を隔てて城を望むと、城後の挾楳山が磊砢として城上に蔽ひかぶさつて見える。哈達（山峯）の名はこれから出たのに相違ない。盛京通志によれば、哈達には古城と新城とがあり、その新城は衣車峯の上にあるといふ。衣車（ice）とは滿洲語で新の義である。

(15) 園田一龜「清太祖勃興初期の行迹」（滿洲學報四、一一七—一二三頁）。

(16) 棟郭部が渾江の中流域、雅爾古部がその下流域なことは議論がない。蘇完部は稻葉博士は之を今の伊通の東、雙陽（刷煙河）の方面に比定せられたが（滿洲歷史地理二、六三八—九頁）、そこは建州からは哈達・葉赫を隔てた先方の烏拉的境内である。左様なところから當時來投する筈がない。蘇完部はやはり渾江の流域で、滿洲（即ち建州）の蘇完部といふ語もある。

(17) 歹商の爲人については、當時の薊遼總督顧養謙の語にも「歹商弱多疑、即職諸酋立之、不能有其衆」とあり、萬曆武功錄の歹商傳には「歹商爲人、氣弱而多疑、不能善使其左右、其左右多有離心」と見え、東夷考略には「歹商醜酒好殺、衆稍貳」ともある。

(18) 那林李羅はいつも強硬論者で、東夷考略にも「那林李羅尤狂謬」とあり、清の實錄にも納林布祿が太祖に對して餘り強硬なのを布齋がなだめかねてゐる様が見えてゐる。

(19) 和田清「滿洲諸部の位置について」（東亞論叢一、九—一一頁）。

(20) 滿洲實錄卷一諸部世系輝發國の條には「彼時蒙古察哈爾國土門札薩克圖汗自將來、圍其城、攻不能克、遂回」とあり、卷八天命十年八月太祖が科爾沁の鄂巴台吉に與へた書にも、「昔圖們札薩克圖汗曾征輝發、時輝發兵五百、帶甲僅五十人、與之戰、不勝而回、云々」とある。

(21) それは明や朝鮮の實錄などを見ると能く解ることであるが、簡便には筆者の「明初の滿洲經略」（滿鮮地理歷史研究報告一四、一五）や園田一龜氏の「明代建州女直史研究」（東洋文庫論叢三二）などを見られるとよい。なるほど金阿哈出などが坊州城にゐたことはあるが、それは古城の廢址であつて、その他にも寨名は時に見えるが、皆眞の城郭ではない。

(22) 當時は西蒙古の衛拉特などにも漸く城居の風が生じたのである（矢野仁一「近代支那史」六八—九頁）。

清の太祖興起の事情について

和田

(23) 韓遜領畫卷1。

(24) 和田清「清祖發祥の地域について」(池内博士還曆記念東洋史論叢、八九八—九〇〇頁)。

(25) 高橋匡四郎「蘇子河流域に於ける高句麗と後女眞の遺跡」(建國大學研究期報2)。

(26) H. E. M. James, Long White Mountain. London, 1888. pp. 231—2.

(27) 稻葉岩吉「申忠」書啓及び圖記」(青丘學叢二九)。「興京二道河子舊老城」(康德六年建國大學。李仁榮「建州紀程圖記」(震檀學報10)。

(28) 和田清「清祖發祥の地域について」(同上、九〇五—六頁)。

(29) 周藤吉之「清代滿洲土地政策の研究」昭和十九年、河出書房。朝鮮の李民婁は萬曆四十七八年の頃、興京老城に虜はれてゐたのであるが、その「建州聞見錄」には「自奴酋及諸子、下至卒胡、皆有奴婢(互相買賣)・農庄(將胡則多至五十餘所)、奴婢耕作以輸其主、軍卒則礪刀劍、無事於農事者、……銀鐵草木、皆有其工、而惟鐵匠極巧、女工所織只麻布、織錦刺繡、則唐人所爲也」とあるといふ。その巧みな鐵匠も漸く明末に現はれたのである。旗田巍氏「明代女眞人の鐵器について」(東方學報東京一一ノ一)。

附記 本論文は昭和二十五年文部省科學獎勵助成金による研究の一部である。